

人と人 つながりの物語

コープデリグループの組合員数は約510万人。組合員の皆さんの数だけ、物語がある。その物語を毎月一つお届けしていきます。描いているのは皆さんのくらしとコープデリの接点。あなたの物語はどんな物語ですか。



illustration: Maiko Dake

千恵さんはコープの宅配を利用し始めて10年たつ。家族4人もコープ牛乳とりんごジュースが大好き、毎週注文する。次男の^{あき}さんが木更津（千葉県）にある大学に入学したのは昨年4月の4月。大学の近くでひとり暮らしを始めた。しかし、飲みなれたりんごジュースが飲めなくなるのは大問題、彼はコープのりんごジュースを飲むために組合員になった。入学直後、首都圏では新型コロナウイルス感染拡大のため緊急事態宣言が出され、大学の入学式は無期延期。授業も全てオンライン、入学時、迷わず入部した野球部も活動禁止になってしまった。

そんななか、週に一度やってくることがコープの配達担当の友廣^{ともひろ}まりえさんだった。いつもニコニコと元気な彼女に、^{あき}さんは元気づけられた。最初は「大学生なんだー、どこにも出かけられないから面白くないわね」という会話から、会うたびに「大学はどうですか？」と聞いてくれた。受け答えに心に寄り添うようなやさしさがあつた。友廣さんがくれる担当者ニュース（^{あき}「まりえ通信」）も家族を大事にしている人柄が伝わってくるものだった。

「あるとき、『コープの人どう？』って晩に聞いたら『めっちゃいいんだよー！今、唯一話せる人』って言うてました。私も息子の家に行つたときに（^{あき}「まりえ通信」）をもらつて帰つて読んだら、それが楽しくて。それからいつも息子に『まりえ通信』取つておいて！』って頼んでます」と千恵さん。

友廣さんと^{あき}さんの会話はいつも2〜3分だったが、大事なのは時間の長さではなかった。知らない土地でひとり暮らしを始めた^{あき}さんには、友廣さんと言葉を交わす時間が、自分が人間社会に存在することを実感できる瞬間だった。

「家族と暮らししていたら『コロナ禍での生活が大変だね』って言い合えたと思うけど、それもできなかったから、友廣さんのことを聞いて、1人で暮らし始めた息子のことを気にかけてくださる方がいるんだなってほっとした」

6月になると野球部の活動が始まり、少しずつ友達もでき、登校して受ける授業も一部始まった。

「あのまま、誰にも会えない状態がずっと続いていたら、自分は少しおかしくなつていたかもしれない。友廣さんが話しかけてくれてありがたかつた」と^{あき}さんは言った。

「コロナ禍で配達する皆さんも、大変で不安だと思います。そんななかで、笑顔で毎週変わらずに配達に来てくれて、さらに励ましてくれるなんて。感謝しています」と千恵さんは笑顔で言った。

私たちはコロナ禍で強いられ、これまでとは違う生活で、当たり前だと思つていた（普通の日常）が、尊いものだったと思ひ知つた。（あの人に会いたい）、（こんな時間を誰かと過ごしたい）、そんな夢を見ている人は多いのではないか。人は人のなかでこそ、人間らしく生きられるのだ。

※配達担当者のおの手作りし、定期的配付するニュース

過去の物語もこちらから読めます



あなたのエピソードをお寄せください。

コープ職員との心に残る出来事を随時募集しています。氏名・電話番号・組合員コードを記入し、郵便（〒336-8526 埼玉県さいたま市南区根岸1-4-13 コープデリ連合会 コミュニケーション推進部宛）か、左記のWeb応募フォームよりお送りください。